

日本学研究の今後の視座へ向けて

天 野 知 香*

今回のシンポジウムは、研究発表に先立つ公開講演会、および各研究発表の発言を通して、日本学研究の諸相をめぐる、実証的な調査に基づく新たな知見を踏まえた非常に充実した議論が繰り広げられた。公開講演として行われたクリストフ・マルケの発言は、江戸時代の画譜や『浮世絵類考』から、1900年のパリ万博のために岡倉天心等によって編纂された『日本帝国美術史稿』に至る、多様な日本の資料や刊行物が、19世紀後半のフランスにおける日本美術の理解において果たした影響や役割を詳細かつ具体的に指摘した。続いて研究発表の口火を切った鈴木廣之は、欧米からの旅行者や滞り者による日本の寺宝などに関する認識が、日本における美術史成立の課程で果たした役割を示唆し、永島明子はマリー・アントワネット蒔絵コレクションを中心に海外の漆器コレクション、とりわけこれまであまり認識されてこなかった19世紀初頭以前に海外に渡った漆コレクションの実体を明らかにした。さらに彬子女王は大英博物館のウィリアム・アンダーソン・コレクションの調査に携わった古筆了任の活動と、英国における日本美術の鑑定等における貢献や影響を詳細に跡付け、最後にニコル・ルマニエールは、同じ大英博物館所蔵の日本陶器コレクションについて、オーガスタス・ウォラストン・フランクスが果たした役割を具体的にたどり、フランクスの知的背景をも明らかにすることで、彼の日本美術の認識がどのような視点に立つものかという点に

も言及した。

内外の発表者による、日本学研究の歴史的展開をめぐる実証的な調査の成果が十分に示された各研究発表は、欧米にとっての「他者」としての日本の文化を、当時の西欧のコレクションや学問的な枠組みの中で理解・整理し、取り込んでゆくプロセスや、そこにさらに協力者や翻訳者、資料の著者・作成者として介入した日本人の視点との興味深い交錯を具体的に明らかにすると同時に、こうした眼差の交錯はまた、鈴木廣之の発表が明らかにしたように、明治以後の日本における近代的な学としての「美術史」の成立を考える上でも重要な役割を果たしたことが示唆された。さらに永島明子が示したように、海外コレクションの実態調査によって日本の蒔絵のこれまでに知りえなかった歴史が明らかにされつつあるといった事例が物語る通り、東西の交流の後付けは今日における美術史の認識をも新たにするものである。

発表後のパネルディスカッションでは、フロアからの個々の発言者に対する質疑応答を通して、より詳細な事実関係が明らかになると同時に、日本の文物をめぐる東西における眼差しがどのような差異を孕みながら交錯したのか、という問題に向けての考察が促された。今回のシンポジウムでは、とりわけ、オーガスタス・ウォラストン・フランクスやアーネスト・サトウ、ウィリアム・アンダーソン、ルイ・ゴンズ、古筆了任等々、日本美術の認識を形作る上で重要な役割を果たした個人の活動に焦点があたることによって、それぞれによる日本の文物の認識や見る体験、それに基づく

*お茶の水女子大学 准教授

価値判断が美術館等のコレクション形成や学問的な美術史の言説の成立プロセスとどのように具体的に結びつくかが示唆される一方、それを支えた個々の人物が持つ視点の文化的歴史的社会的背景や構造はどのようなものであったか、というさらなる問題に踏み込む契機がもたらされた。こうした個別的、具体的な研究の成果は、東西の互いの「他者」との接触がどのような新たな認識をもたらし、それがどのような形でそれぞれにおいてコレクションや「学」として形成・制度化されたのか、さらにそこにどのような互いの背景をなす歴史的社会的な状況やイデオロギーが関わりまた、歴史的に変化して行ったのか、等々、異文化の接触と「学」の成立、そのさらに政治的文化的な意義や意味、ひいては今日における日本学研究の自覚的な視座といった刺激的な問題をめぐるより包括的な考察へと、今後研究をつなげてゆく必要を喚起した。着実な実証的調査に裏付けられることで、そのような展開を可能とする機が十分に熟したことを感じさせた今回のシンポジウムは、今後更に深まり行く日本学研究の方向を予感させるきわめて意味深い指標をなすものであったといえるだろう。